令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	岐阜県	学校名	御嵩町立御嵩小学校

人権課題	子供	対象学年・取り扱った教科等	全学年・学級活動	時数等	各クラス１時間

目標・人権教育のねらい	・「ぽかぽか郵便」で仲間のがんばりや感謝の気持ちを伝えたり、仲間に認められたりすることを通して、気持ちを伝え合う大切さや心地よさに気付けるようにする。
実施した内容	・スマイル委員会が企画運営し、学級や学年、学校全体の仲間への良いところを伝え合うメッセージを「ぽかぽか郵便」としてカードに書いて伝える取組を行った。 （６月なかよし遊び後、１０月運動会後、３月年間を通じて）
工夫した点	（指導上の工夫） ・「ぽかぽか郵便」ではいろいろな場面での仲間の良いところをはがきを使って伝え合った。 ・３つの「ぽかぽかアンテナ」「自分と誰か」「誰かと誰か」「誰かとみんな」を示し、よさ見つけの視点の広がりをねらった。 ・「ぽかぽかアンテナ」の視野は日常の帰りの会で行われている「スマイルタイム（よさ見つけ）」の視点としても活用した。 ・委員会で、「ぽかぽか郵便」を受け取った児童へのインタビューを放送し、送った側と受け取った側、双方向に思いが伝わるようにした。 （地域や関連機関との連携） ・町主催の「笑顔づくり子どもサミット」において６年生の代表児童が取り組んできたことについて発表した。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	・道徳科の重点項目を小中共通で「思いやり」とした。人権に関する価値項目について学んだときには「ぽかぽかアンテナ」と関連付けて振り返った。
事業成果	・知識的側面：「仲間との関わりの中で、よいとこ見つけの視点がたくさんあることを知る。」 人と関わる場面には「自分と誰か」だけではなく、「誰かと誰か」「誰かとみんな」のようにいろいろな関わりがあることに気付くことができた。 【児童変容の分析】 ３つの「ぽかぽかアンテナ」にとどまらず、「みんなとみんな」「自分とみんな」といった視点からもよさを見つけ、いろいろな関わりの中によさがあることに気付くことができた。 ・価値的・態度的側面：「仲間はあなたのよいところを認めていると思いますか。」 事業開始時：５７％　⇒　事業終了間際：６３％ 【児童変容の分析】 普段は直接伝えられない仲間のよさを伝え合うことで、互いに認め合う雰囲気ができ、自分自身が認められていることを実感できていた。 ・技能的側面：「あなたは仲間のよさを見つけていますか。」 事業開始時：５８％　⇒　事業終了間際：６４％ 【児童変容の分析】 「ぽかぽかアンテナ」を示したことにより、仲間のよさを見つける視野が広がり、いろいろなよさを見つけることができるようになった。また、郵便の内容や受け取った児童へのインタビューを放送したことでお互いにどのような気持ちになるのかを知り、さらに意欲的に仲間のよさを見つけ、伝えるようになった。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	岐阜県	学校名	御嵩町立御嵩小学校

人権課題	子供	対象学年・取り扱った教科等	全学年・特別活動	時数等	８時間

目標・人権教育のねらい	・異学年交流を通して様々な子ども同士が関わる経験を積み、人と活動する楽しさや相手を受け入れる気持ちが育つようにする。
実施した内容	・縦割り班ごとに６年生が計画して「なかよし遊び（異学年遊び）」を行った。 （昼休み、年間８回）
工夫した点	（指導上の工夫） ・６年生が班の仲間が関わり合うことができる遊びを考えたり工夫したりして計画し、意図的に関わりが生まれるようにした。 ・遊びの終わりにスマイルタイム（振り返りの時間）を設け、低学年の子へのやさしい声かけなど、仲間のよさを班の仲間で共有できるようにした。 ・グループ担当の教員からも仲間との関わりの視点からよかった点を伝えた。 （地域や関連機関との連携） ・町主催の「笑顔づくり子どもサミット」において６年生の代表児童が取り組んできたことについて発表した。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	・生活科の「おもちゃランド」において、年下の子供との関わり方の手本として、なかよし班の高学年の言動を紹介した。

事業成果

・知識的側面：「いろいろな立場の仲間とよりよくかかわるために大切なことに気づく」
　遊びやルールを工夫することやぽかぽか言葉や行動を大切にすることで、グループの関係をよりよくできることに気付いた。
【児童変容の分析】
　当初は互いに遠慮する姿があったグループが温かく関わり合えるようになったのは、「ぽかぽか言葉」や行動における高学年のやさしい言葉や互いのよさ見つけの活動があったことを共有することができた。

・価値的・態度的側面：「仲間はあなたのよいところを認めていると思いますか。」
　事業開始時：５７％　⇒　事業終了間際：６３％
【児童変容の分析】
　遊びの後のスマイルタイム（振り返り）でよさを伝え合ったことで、異学年の仲間からも認められているという思いをもつことができた。

・技能的側面：「人とかかわる時、相手の気持ちを考えて行動していますか。」
　事業開始時：５８％　⇒　事業終了間際：６４％
【児童変容の分析】
　自分と年齢の異なる相手と関わって遊ぶなかで自分との違いを体感したことで、その子に合わせた声かけや力加減ができるようになった。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	岐阜県	学校名	御嵩町立御嵩小学校

人権課題	高齢者	対象学年・取り扱った教科等	５年生・総合的な学習の時間	時数等	６時間

目標・人権教育のねらい	・「だれもが幸せに暮らすために自分にできることは何か」を自分自身に問いながら課題を解決することができる。 ・高齢者疑似体験を通して高齢者の苦労や願いを感じ、福祉に対する意識を高める。
実施した内容	・高齢者疑似体験では、体験セット（ベスト・手袋・おもり・ゴーグル・杖・財布）を使ってペアで孫と高齢者役になり、高齢者の視点を体験した。 ・体験したことや調べたりしたことをまとめ、自分たちにできることを交流した。
工夫した点	（指導上の工夫） ・体験セットを活用することで、講義だけでは理解できない高齢者の困り感を、一人一人が体験的に学べるようにした。 ・体験活動で終わらないように、家族や近くにいる高齢者と接するとき大切にすることについて考えることで実践力を高めた。 （地域や関連機関との連携） ・町の社会福祉協議会と連携して授業を実施した。授業のねらいや活動方法等についての打ち合わせを綿密に行うことで、すべての児童が高齢者の困り感に気付くことができるようにした。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	社会科「わたしたちの生活と食料生産」において、生産者の高齢化と関連付けて学習した。

事業成果

・知識的側面：「互いのことを理解し、互いのことを尊重しなければならない。」
　高齢者が生活する中での大変さを理解するとともに、個々の高齢者によって困り感が異なり、個に応じた支えが必要なことがわかった。
【児童変容の分析】
　「福祉」とは何か、ということについて学び、様々な対象者の中に高齢者がいて、高齢者が生活していく中で大変なことがたくさんあることを知った。また、高齢者自身でできることがあり、その尊厳を大切にすることが重要であることに気付いた。

・価値的・態度的側面：「高齢者のために何ができるのかを考えることができる。」
　身近な生活場面を想定して、高齢者のために自分にできることは何かを考え、バリアフリー宣言をつくることができた。
【児童変容の分析】
　高齢者疑似体験を通して高齢者のために自分達には何ができるのか考える中で、思いやりをもった言動をすることやまず声をかけてみるといった思いをもつことができた。

・技能的側面：「高齢者が困っているときは、進んで助けることができる。」
　高齢者のためにまず何ができるかを実際の場面を想定して具体的にできることをまとめることができた。
【児童変容の分析】
　身近な高齢者や自分の生活場面において出会うであろう高齢者に対して「何かお困りですか」「どうされましたか」など、実際の場面での関わり方を共有する姿が見られた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	岐阜県	学校名	御嵩町立御嵩小学校

人権課題	障害者	対象学年・取り扱った教科等	５年生・総合的な学習の時間	時数等	６時間

目標・人権教育のねらい	・だれもが幸せに暮らすために自分にできることは何かということを自分自身に問いながら課題を解決することができる。 ・車椅子体験や白杖体験、点字体験、手話講座を通して身体障害者や視覚障害者、聴覚障害者の大変さや思いを学ぶことができる。
実施した内容	・様々な体験活動（車椅子体験、白杖体験、点字体験、手話講座）（８時間） ・体験したことや調べたりしたことをまとめ、自分たちにできることを考え、バリアフリー宣言を作成し、交流した。
工夫した点	（指導上の工夫） ・様々な障害の困難さについて学ぶと共に、それぞれ障害があるなかでも、自分でできることは積極的に行っていることを理解し、手を差し伸べるのは本当に困っているときであることを理解できるようにした。 （地域や関連機関との連携） ・町の社会福祉協議会と連携して授業を実施した。授業のねらいや活動方法等についての打ち合わせを綿密に行うことで、すべての児童が障害のある方の困り感に気付くことができるようにした。 ・手話の講師に来ていただき、聴覚障害について学び、簡単な言葉や自分の名前等について手話で表すことができるようにした。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	・５年生国語「みんなが使いやすいデザイン」「やなせたかしーアンパンマンの勇気ー」、道徳「ヘレンと共に」（希望と勇気、努力と強い意志）の学習の際に、障害者について学んだことを想起しつつ学びを進めた。
事業成果	・知識的側面：「互いのことを理解し、互いのことを尊重しなければならない。」 　それぞれの障害に対する理解が深まった。それぞれ困り感が異なり、個に応じた支えが必要なことがわかった。 【児童変容の分析】 　車椅子体験、白杖体験、点字体験、手話講座を通して、それぞれ困難さが異なることに気付き、障害に応じた支えが必要なことを理解することができた。さらに、障害のある方自身でできることがあり、その尊厳を大切にすることが重要であることに気付いた。 ・価値的・態度的側面：「障害者の方のために何ができるのかを考えることができる。」 　身近な生活場面を想定して、障害のある方のために自分にできることは何かを考え、バリアフリー宣言をつくることができた。 【児童変容の分析】 　車椅子体験、白杖体験。点字体験、手話講座を通して障害のある方のために自分たちにできることについて考える中で、思いやりをもった言動をしようとする意欲をもつことができた。 ・技能的側面：「障害者が困っているときは、声をかけて自分にできることを進んで手伝うことができる。」 　障害のある方のためにできることを実際の場面を想定して具体的にまとめることができた。 【児童変容の分析】 　視覚障害者を想定して、落ち着いた口調で声をかける姿があった。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	岐阜県	学校名	御嵩町立御嵩小学校

人権課題	外国人	対象学年・取り扱った教科等	４年生・外国語活動	時数等	５時間

目標・人権教育のねらい	・外国にルーツをもつ高校生と英語で会話する活動を通して、相手の丁寧であたたかい対応に気付き、感謝の気持ちを伝えることができる。 ・身近にいる外国にルーツをもつ高校生と接することで外国人や外国の文化等への理解を深める。
実施した内容	・外国語活動「What do you want？」の単元で、町内にある高等学校と連携し、外国にルーツをもつ生徒と英会話を行った。 ・交流する中で、高校生に感謝の気持ちを伝えた。
工夫した点	（指導上の工夫） ・英会話に自信がある児童とそうでない児童との間で活動に差が出ないようにするために、グループ単位で活動した。 ・できるだけ多くの高校生と話すことができるように、会話に必然性を持たせる場を多く設定した。 ・授業の最後にサンクスタイムを設け、個々の児童が自分の言葉で感謝を伝える機会をつくった。 （地域や関連機関との連携） ・高等学校と連携し、外国にルーツをもつ生徒と関わる場を多く設定した。 高校の先生と参加する生徒のルーツや、個別の留意点等について事前に打ち合わせた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	・４年生道徳「ブルラッシュ」（国際理解、国際親善）において、外国にルーツをもつ高校生との関わりを想起しながら他国の人々や文化を大切にしようとする心情を育てた。
事業成果	・知識的側面：「日本には多くの外国人が住んでいる。」 事業開始時：１８％　⇒　事業終了間際：７６％ 【児童変容の分析】 なんとなく日本にも外国人が住んでいることを認知していたが、町内の高校には多くの外国にルーツをもつ生徒が通っていることを知り、身近にも外国人が多くいることを実感した。 ・価値的・態度的側面：「外国人に対して自分から関わろうとする。」 授業の中で、外国にルーツをもつ高校生に自分から話しかけて学習を進めることができた。 【児童変容の分析】 初対面の外国にルーツをもつ高校生と英語で話すことに不安こそあったが、徐々に打ち解けることができた。実際に外国にルーツをもつ生徒と接することで、自分と同じように笑ったり困ったりするものだということを実感していた。 ・技能的側面：「手伝ってもらったり、助けてもらったりしたときには相手に感謝の気持ちを伝えることができる。」 個々の児童が一人一人の高校生に自分の言葉で感謝を伝えることができた。 【児童変容の分析】 サンクスタイムでは、普段は素直にありがとうと伝えることが苦手な児童も、高校生に「言い方が分からないときに教えてくれた。」「優しく教えてくれた。」等、具体的に話し、笑顔で感謝の気持ちを伝える姿が見られた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	岐阜県	学校名	御嵩町立御嵩小学校

人権課題	インターネットによる人権侵害	対象学年・取り扱った教科等	５・６年生・総合的な学習の時間	時数等	１時間

目標・人権教育のねらい	・昨今のSNS等によるインターネットでの人権侵害について学び、これからの社会を生きていく上での情報モラルを身に付ける。
実施した内容	・人権講演会「インターネットやSNS等との上手な付き合い方」 ・講演後に、感想や今後のインターネットとの付き合い方について、考えたことを交流した。
工夫した点	（指導上の工夫） ・インターネットやSNSを「使わない」ではなく、「上手に付き合えるようにする」というゴールを設定したり、実例を示しながら話したりすることで、自分ごととして話を理解できるように工夫した。 ・道徳の学習と関連させて、事後指導を行った。 （地域や関連機関との連携） ・外部講師を招き、講話をしていただいた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	・５年生道徳「すれちがい」「知らない間のできごと」、６年道徳「自分を守る力って？」の学習において、講演会での内容を想起しながら学べるようにした。

事業成果	・知識的側面：インターネット上の人権侵害についての認知率 事業開始時：５６％　⇒　事業終了間際：８０％ 【児童変容の分析】 児童へのアンケート結果（５月→１２月） ・価値的・態度的側面：インターネット上の人権侵害について理解し、安全に使おうとする思いをもつことができる。 インターネット上の問題に関わって、身の回りの危険について考えようとすることができた。 【児童変容の分析】 講話後に、児童からインターネットやSNSに関する相談があったり、学級内でインターネットに関わる問題が話題に上がったりするなど、関心が高まっている様子がみられた。 ・技能的側面：インターネットの人権侵害を自分ごととして捉え、使用状況を振り返ったり、使用方法を見直そうとしたりすることができる。 自分自身のインターネットの使い方やインターネットのとの関わり方について振り返ることができた。 【児童変容の分析】 講話を通してインターネットやSNSの危険性を理解し、自分に置き換えて使用状況を振り返りながら、自身の使用方法について相談する姿がみられた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	岐阜県	学校名	御嵩町立御嵩小学校

人権課題	その他（いじめ未然防止）	対象学年・取り扱った教科等	全学年・学級活動	時数等	２時間

目標・人権教育のねらい	・児童一人一人が日ごろの言動を振り返り、正しい判断のもと、思いやりの心をもち、仲間とともに助け合う行動力を育てる。 ・日常生活が安心・安全で過ごすためには、自分のことを認めてくれる仲間の存在があることに気付き、感謝の気持ちをもてるようにする。
実施した内容	・ひびきあい集会（年２回）およびハイタッチあいさつ運動 ・スマイルの芽、スマイルの花（通年）
工夫した点	（指導上の工夫） ・前年度までひびきあい集会は１２月のみであったが、本年度は、年度当初にも位置付けた。５月に目指す姿（スマイルの芽）を明確にし１２月に振り返り（スマイルの花）を行った。 ・ひびきあい週間中に、運営委員会が中心となってハイタッチあいさつ運動を行った。 （地域や関連機関との連携） ・ひびきあい集会には町の人権擁護委員に参加していただき、児童の交流の様子や取組の様子を見て、感想を話していただいた。 ・それぞれの取組について、町主催の「笑顔づくり子どもサミット」で６年生の代表児童が発表した。 ・ハイタッチあいさつ運動では、中学校の生徒会やPTA、学校運営協議会の方にも協力していただいた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	・各学年の道徳において、いじめを扱った題材をひびきあい週間中に実施した。 ・５年生は総合的な学習の時間における高齢者、障害者福祉の学習と関連付けて取り組んだ。
事業成果	・知識的側面：「世の中には多くの人権に関する問題があります。その問題について自分が知っているものを選んでください。 質問項目・・・子ども、女性、高齢者、障害者、同和問題、アイヌの人々、外国人、ハンセン病患者等、インターネット、いじめ 今年度取り組んだ人権課題の認知率は、すべての項目で増加した。 【児童変容の分析】 学年朝会や学級活動、特別の教科「道徳」などを通して、解決されなければいけない多くの人権問題があることを理解した。 ・価値的・態度的側面：「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか。」 事業開始時：８９％　⇒　事業終了間際：９３％ 【児童変容の分析】 ひびきあい集会やスマイルの芽・スマイルの花の活動を通して、児童が自らの言動を振り返り、仲間の思いに気付く機会が増えた。これらの活動を通して、いじめを「自分事」として捉える意識が深化した。 ・技能的側面：「人とかかわる時、相手の気持ちを考えて行動していますか。」 事業開始時：５８％　⇒　事業終了間際：６４％ 【児童変容の分析】 ハイタッチあいさつ運動等の継続的な取組を通して、児童が仲間との関わりを振り返る機会が増え、相手の立場になって考えることの大切さを実感する場面が増えたことが行動につながった。